
富士山

源雪風

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

富士山

【Nコード】

N0147K

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

化け猫三人とわけありの男が富士山をみにゆく。
新事実発覚で化け猫がびっくり！

あるところに、仲のいい化け猫三兄弟がおりました。

彼らは色々なものに化けて人をからかうのが趣味でございました。

ある日のこと、次男が木に化けて人間観察していると、男が絵を描いているのを見つけました。

男は江戸で有名な浮世絵師でございまして、その時描いていたのは、べっぴんさんでございました。

その絵を見た次男は、いいはずを思いついたのでございます。

次男は、その絵のべっぴんさんそっくりに化けて、男に話しかけたのでございます。

「ちよいと、そこのお兄さん。」

「お、お千代さん！これは、あの、その・・・。」

男はさっきまで描いていた絵を懸命に隠したのでございます。

「何だい？見せてもらんよ。」

べっぴんさんが色気たっぷりで言うと、男は仕方なく絵を見せたのでございます。

「ほほう。よく描けているじゃあないか。」

男はタコのごとく真っ赤になってうつむいたのでございます。

次男は愉快になってきて、次はいかなるいたずらをしかけようかと考えてございます。

「今度二人で富士山でも見に行かないかい。私はどうしてもお前さんと行きたいの。」

色目を使ってすり寄る次男。

「あ、あつでいいのならぜひ。」

男はたこからゆでだこになったのでございます。

「じゃあ、約束だからね。」

次男は男の手を優しく握ってから去ったのでございます。

早速、今日の面白い出来事を長男と末っ子に話したのでございます。

「そりゃ面白そうだ。男がぽーっとなつているときに、鬼に化けて脅かしてやれ。」

と長男は、がはがは笑った。

「さすが兄貴。俺もそんなことやってみてえな。」

と末っ子は羨ましそうだ。

「男め。耳まで真っ赤になつていやがった。笑えるぜ。」

「ところで、いつ富士山を見に行くんだ。」と長男。

「明日行かつて約束しておいた。」

「俺も付いていっていい？」と末っ子。

「いいぞ。兄さんの雄姿をしつかり目に焼きつけときなあ。」

翌日。次男は例のべっぴんさんに化けて男を呼び出した。

男は顔を真っ赤にして、ぎくしゃくした足取りでやってきた。

「お前さんに会いたくて昨日はちつとも寝れやしなかったよう。」

「そうか。そうか。実はあつしもそうなんだよ。」

長男と末っ子は雲に化けて、空から二人を眺めていたのでございます。

「兄さんが、あんな美人に化けられるなんて、すごいや。」

「さすがは俺の弟だ。」

「退屈だなあ。よし。雨でも降らせてみよう。」

末っ子は体毛を雨粒に変えて、二人にめがけて降らせてやった。

「あら、雨。いやねえ。」

あいにく、周りは原っぱで、雨宿りもできそうになため、男は上着を脱いで次男にかぶせた。

「これでもう大丈夫でしょう。」

「あら、お優しいのね。」

末っ子は雨を止めた。

このまま雨を降らせていたら、はげだぬきになってしまう。

急に雨が止んだので、次男は長男が末っ子の仕業だと気がついた。

次男と男は、ずっと歩いているうちにお腹が減ってきてしまった。
ぐーきゅると、次男のお腹が鳴る。

「あら、いやだ。お腹の虫が。」

「じゃあ、あそこのうどん屋で、昼飯にしよう。」

二人はうどん屋に入った。

「あつしはたぬきうどんにする。お千代さんは？」

「じゃあ、私も。」

次男は、たぬきうどんと聞いてたぬきの肉がはいっているのだと思い、ぞっとした。

しかし、実際に出てきたのは、揚げ玉がたくさん載っているうどんだったので一安心した。

うどんを食べていると、いきなり男が話しかけてきた。

「なあ。お前は、俺たちが出会った日のことを覚えているか。」

次男はもちろん知らないのに、困り果てた。

「ああ。あの日のことね。覚えているともさ。」

「そうか。そりゃあよかった。」

男はそれだけ尋ねると、黙ってうどんをすすった。

「お前さんは本当に私が好きなんだねえ。」

「そりゃ当たり前えさ。俺たち夫婦じゃないか。」

そのころ、長男と末っ子は空でぶわぶわ浮かんで待っていた。

「遅いな。兄さん。」

「男女が恋仲になると、周りのものが見えなくなるからな。時が過ぎるのも気にならないんだらうよ。」

長男は得意そうに言った。

「兄さん。兄さんが出てきたよ。」

「分かりにくい言い方だなあ。」

「長男。次男が出てきたよ。」

「よし。追いかけるぞ。」

長男は恋の話をしていた俺も周りのものがみえてなかったな。と苦

笑した。

次男は男と話しながら歩いている。

男はなぜか、二人の過去の思い出話ばかりしたが、次男は何とか誤魔化すのが大変だ。

ようやく富士山の見える所に着いたときも昔の話をしてきた。

次男はたまらなくなつて

「どうしてお前さんは昔の話ばかりするんだい。」
と聞いた。

「なぜって……。」

男はそれつきり黙りこんでしまった。

風がすすきを揺らす音が聞こえる。

しばらくして、男は決心したような顔で次男の方を見て言った。

「お前は、本物のお千代さんじゃあないんだろう。」

「どうしてそんなことを言うんだい。今、目の前に千代ならいるじゃないか。」

「お千代は……もうとつくの昔に死んでいるんだ。」

次男は体の力が抜けて、元の化け猫の姿に戻ってしまった。

「お前のおかげで昔の幸せな気持ちを思い出せた。実はな、あつしはお千代の後を追つて死のうか考えていたところだった。でも、お前の化けた姿を見たら、一生懸命生きなきゃならねえって思ったよ。」

空から、二人を見ていた長男と末っ子が涙の雨を降らせた。

「あつしは、今度は猫の絵が描きなくなってきた。どうだい。お前、家に住まないか。」

「ふつ。俺は自由な化け猫なんदी。飼い猫なんざあならねえよ。でも、お前がそこまで言うんだったら、たまに遊びに行つてやるよ。」

次男は男に背を向けて言った。

「じゃあな。もう死のうだなんて思うんじゃないぞ。」

次男はパツと男の前から姿を消した。
涙の雨はいつまでもいつまでも降り続けたそう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0147k/>

富士山

2011年1月8日23時49分発行